

岩手県野田村の支援活動報告（2011年5月11日）

ボランティアセンター事務局・人文学部・李永俊

チーム・オール・弘前の野田村災害支援・交流ボランティアの第2回目の活動が行われました。5月9日の授業開始以降の初めての活動であったため、参加者の確報が心配されました。残念ながら予想通りちょっぴり寂しい人数の活動となりました。参加者はボランティアセンターが活動を始めてから最も少ない24名（学生13名、教員1名、一般市民10名）でした。男女比は男性18名、女性6名でした。

参加人数の激減はわれわれのチーム・オール・弘前だけでなく、野田村のボランティアセンターでも同様の様子でした。いつも100名以上のボランティアが活動していたのに、この日は4つの団体と個人参加者を合わせて54名でした。震災から2ヶ月目となる節目の日であったのですが、少しさびしいスタートとなりました。



道の駅おおのでの集合写真



ちょっぴり寂しいバスの中

移動中のバスでは、事務局の日野口さんの司会で、自己紹介と簡単なオリエンテーションが行われました。今回は皆勤賞の頼もしい顔ぶれに加え、初参加の方が多く見えました。今後の継続的な支援のためには、心強い仲間が一人でも増えることは大変嬉しいことです。初顔の中に現役高校生の二人が学校を休んでまで参加してくれました。今後の長い人生のためには何より有益な時間になるだろうと誘ってくれた父親が紹介してくれました。若い世代にとって社会とのつながりを実感し、社会に対する責任感を感じる何よりも有益な機会になると私自身も確信しています。そういう意味で考えると、より多くの高校生が参加できる機会を提供することも今後検討していかなければならないなと思いました。

快晴の野田村に到着後、女性の6名と男性は5名、5名と8名の4つの班に分かれ、活動を行いました。女性全員は、体育館内での支援物資の仕分けと被災者の要望に応じた物資の抽出にあたりました。男性の3つの班は、個人参加者のボランティアと合流し、主に被災者宅の瓦礫撤去を行いました。我々の班は、村役場の近くのおなじみの久慈さん宅の近くでした。通りかけの我々を見つけて、久慈さんが大きく手を振ってくれました。とっても嬉しかったです。



物資仕分けの様子



被災者宅の瓦礫撤去の様子

支援物資が山積みとなっていた体育館は、4月下旬よりかなり整理されていました。古着などは、町にある洋品店のようにサイズ別に分かれ、洋服がハンガーに掛けられ、整理されていました。食品などもスーパーのように品目別に分類され、かなり探しやすくなっていました。ただ、被災者からのリクエスト表は相変わらず解釈が難しく、ボランティアの人がニーズ表を通して、この色が似合うのではないかと、これくらいがいいかななど想像を膨らませて、被災者の皆さが喜ぶようなものを探すのに必死でした。時々、読めないようなニーズ表もあって、体力よりは想像力が要求される仕事となっておりました。



被災者と一緒に瓦礫撤去



札幌からのボランティアと交流

男性陣は、おなじみの個人宅の瓦礫撤去作業でした。田上君のチームは被災者と一緒に瓦礫撤去にあたりました。最初は無口だった被災者の方が、一緒に作業していくにつれて、津波の様子などを話してくれたそうです。津波は第一波はそう大きくなかったようで、一波の後に海の様子を見にいて被害にあわれた方が多かったようです。そして、我々は北海道から20日分の食糧を積んでフェリーで来てくださった個人参加のボランティアの方と一緒に作業しました。休憩時間に被災地への熱い思いが聴けました。もう一人は本家が岩手だという方で、少しでも恩返ししたいとのことでした。三者三様の思いで参加しているのですね。新しい出会いがあった活動でした。

(人文学部教員 李永俊 記)